

西田哲学と幾何学の本性

伊藤 孝(Takashi ITO)

西田幾多郎は、時間と空間に関して詳細に分析している。絶対矛盾的自己同一という難解な述語で示される彼の科学哲学は、現代物理学における非ユークリッド幾何学により基礎づけられている。とりわけ、数学を基にした確率や統計は、科学实在論として時空系を考察する上で重要な概念となるものだ。それは、あくまでもカントが示すアприオリに総合的な知識の性質を求める現代哲学の課題でもある。つまり幾何学の根本にある本性を検討することで絶対矛盾的自己同一は、物理主義の観点から批判可能となる。即ち、現代科学の使命は、物理的物体を常に経験に照らし合わせて自己限定していくことにある。こうして西田は、行為的直観的に物理学の法則を取り入れ経験のあり方について反駁していると思われる。例えばカントによるコペルニクス的転回を通じて主観と客観は、見事に区別せしめたわけだが物自体において如実に表象しているようである。それは、能動性と受容性の概念を契機にして時間と空間が形成される点において示唆に富んでいる。したがって、幾何学を純粹に視覚化するには、マッハが示す中性の一元論あるいは物理的なものと心理的なものを図式化する多元論を克服せねばなるまい。しかしながら、思惟経済の原理に幾何学の本性を見出すのは、困難なものだから容易いものではない。むしろ、数学を駆使した確率や統計に依存して時間と空間は、ユークリッド幾何学のように点、直線、平面ではなくて n 次元の概念で解明される。その方法論としてポパーが示す絶対的な科学観を否定する仮説演繹方法は、重要な概念になる。それは、自然科学と社会科学を同一視する方法の単一性、状況分析と呼ばれるものだが、現代科学における不確定性を表象している。

このような科学の不確定性は、決定実験によりホーリズムとかデュエムークワインテーゼとして解釈できうるがラプラスのデーモンにおいても同様である。それは理論負荷性を困難なものにさせるが、あくまでも仮説演繹方法に基礎づけられなければならない。なぜならば、科学の進化は、絶対的な状態ではなくて暫定性の価値に見出されるからである。そうした不確定な要素を許容する形でポパーや論理実証主義者による社会科学の構築は、批判的に検証可能となる。その幾何学の部分では、体系の中で確率や統計が動的に解釈されており図式の異質性に特質を求められる。西田幾多郎にとっては、行為直観的に不確定性を説明するべきところであり、絶対矛盾的自己同一の概念だったと思われる。こうした歴史的世界を構築するには、マルクスの唯物史観に準える社会変動についても批判的に捉える必要がある。それは、フランス革命のような歴史的な出来事を予測できるもしくはできないという視点から科学の方法論的な規則として経験づけることである。これに対してマッハは、時間と空間の系列を思惟経済の原理へと特化するが唯物史観にまで準えていないと思われる。しかしながら、ハイデガーが『存在と時間』で指摘しているような時間と空間に関わる現存在を認め

てからフッサール現象学の方法により歴史性は、よりよく理解できるかもしれない。即ち、歴史性とは、テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼという弁証法で展開されるが空間における時間性を復権せしめることである。

もちろん、それは、アインシュタインの相対性理論をも包括する過去、現在、未来という範疇で実存哲学として解釈できるのではなからうか。この見かけ上の範疇は、ラプラスのデーモンとして絶対矛盾的自己同一に図式化する根拠となる。したがって、古典物理学からハイゼンベルクの量子力学へと変容した理由を説明するには、絶対的な虚構科学があるべきである。科学の発展には、たとえ暫定的な位置を保とうとしなければならなくても背景的知識がある時には必要である。そうでないと理論物理学に依存する確率や統計は、文字の羅列にすぎず役に立たない無意味なものとなるだろう。経験の内容を充実していくのが現代科学の課題であるからには、常に物理的対象とそれらを照らし合わせるのである。そうした実在性は、絶え間ないヘラクレイトスの流れで把握される概念となり、志向性を求める現象学に近似した形相と質料の科学哲学でもある。

幾何学の本性は、時間と空間に即して展開されるベルクソンの純粹持続でもある。そして、それは、フッサール現象学に準えたハイデガーの生の哲学により解釈可能となる。西田幾多郎が絶対矛盾的自己同一とみなした、このような時間と空間の系列は、絶対無の境地に入り込み場所の位置や運動感覚を把握する手段となる。したがって、西田幾多郎の世界観哲学は、現代に通じる幾何学の原理として常に不確定性を探求してゆくのである。ポパーの3世界論に従えば、これらは、仮説演繹体系により科学の進歩を図式化したと思われる。特に、ポパーが示したラプラスのデーモンは、現象学を背景的知識として構成し直した絶対なる科学観であると思う。しかしながら、仮説演繹体系を維持するには、暫定的な科学知識をアド・ホックに確証しなくてはならない。例えば、数学的帰納法は、創造的な直観でもって無限なる数を確定してゆく過程を表象しているが基本的に暫定的なるものである。われわれが確率や統計に確からしさを求めるのは、実用的な部分を100%にまで高められないからである。即ち、現代科学においては、テスト可能性とか反証可能性の度合いを充実してゆくことが重要である。そうしてトポロジーが連続して把握されるのは、この不確実な部分を純粹直観に基礎づける点にある。つまり、射影幾何学、幾何学的空間の本性は、直観によって基礎づけられておりポパーが3世界論と呼ぶ領域で操作可能となる特質をもつ。その思想は、プラトンのイデアの世界でありながら計り知れないフィードバック効果をもたらす物理主義の見方である。このような世界観は、西田哲学の根本的な原理として働く絶対矛盾的自己同一の概念に近似していると思われる。

こうした行為直観的な歴史世界を構築する西田幾多郎は、マッハが示す思惟経済の原理を幾何学に基礎づけた。その中でもアプリアリに総合的な科学観を幾何学に求めたカントの示唆は、西田幾多郎の科学哲学にも見出される。それは、あくまでも直観に基づいた時間と空間の形成に即して展開されるべきである。本発表では、そうした西田幾多郎の科学観を検討して幾何学の本性について明らかにするけれどもポパーやマッハの思想、論理実証主義、現象学にも言及する部分がある。また、仮説演繹体系は、不確定な要素として幾何学を考察する上で課題となるものである。

